

十和田市立 新渡戸記念館だより

上空から見た 稲生川取水口

—パラグライダーから撮影—

パラグライダー愛好家・漆館良治さんより太素塚上空からの航空写真を寄贈いただき、第38号で紹介しましたが、漆館さんからさらに稲生川取水口周辺を撮影した写真もいただきましたので紹介します。



航空写真が伝えること

右上の写真は、平成16年10月30日正午から午後1時頃に撮影されたものです。稲生川は、写真手前に写る取水口（市内法量）から天狗山、鞍出山の2つの山をトンネルで通り、十和田市の中心街へと流れています。

稲生川取水口上空から、十和田市街地に向かって撮影された写真には、鞍出山と天狗山の2つの山の地形がはっきりと写っています。写真右側に蛇行して流れる奥入瀬川が写っていますが、周囲より一段低いところを流れているのがわかり、水源の奥入瀬川から三本木原台地に水を上げるのがいかに大変だったかがわかります。また、稲生川工事は幕末に行われましたが、当時の絵図面を航空写真と比べると、非常によく地形の様子を描写しており、技術水準の高さに驚かされます。

取水口部分の拡大



「新渡戸新田開設地図・新田上水口より矢神中津迄」（安政六年・一八五九年／盛岡中央公民館所蔵）
稲生川の取水口から天狗山と鞍出山の穴塚部分を詳細に描いている。「六戸川」は奥入瀬川のこと。

特集 新渡戸記念館の知られざる名品たち

当館の所蔵品は、幕末の三本木原開拓の資料や新渡戸稲造の旧蔵書、直筆の書のコレクションなどがよく知られていますが、それ以外にも一見の価値ある資料を展示しています。今回はこのような「知られざる名品」の一部をご紹介します。

新渡戸家甲冑コレクション

当館の一階展示室・武将コーナーには新渡戸家伝来の甲冑かっちゅうを展示しています。中には、甲冑師の一派として名高い明珍派あきたまの甲冑である「錆色塗萌黄緋さびいろぬりもえぎおどし」があります。

これは戦国時代の甲冑であり、兜には明珍勝正の銘が刻まれ、鎧は明珍信家作と伝えられています。また、かつて武家の家には戦の時に集めた兵に貸す「御貸鎧」がそれぞれの禄高にあわせて準備されていましたが、粗末な鎧として捨ててしまう家が多く、まとまった形で残ることが少ないと言われています。当館には新渡戸家で保存していた20領あまりの御貸鎧が残っており、史料的な価値が高いと言われています。その他、戦国時代よりさらにさかのぼる、南北朝時代の様式に似た兜もあり、製作年代等については現在調査中です。



▲兜の筋や星が大造りなところなど、南北朝時代の様式に似ています。

◀錆色塗萌黄緋（戦国時代）



イサム・ノグチ作▶
新渡戸稲造博士
(1934年/ステンレス製)
側面に「DR. INAZO NITobe
ISAMU NOGUCHI 1934」と
刻まれています。

イサム・ノグチ作「新渡戸稲造」

20世紀を代表する彫刻家イサム・ノグチが制作した新渡戸稲造の顔のレリーフを当館で所蔵しています。イサム・ノグチは数々のユニークなモニュメントを制作し、パリ・ユネスコの庭園など環境設計も手がける総合芸術家ですが、このレリーフが作られた1930年代には、ステンレス製の肖像作品を多く手がけています。

新渡戸稲造のレリーフが制作された経緯について、稲造の従兄弟にあたる太田常利氏の娘・村瀬成子さんから、平成7年来館の折にお話を伺いました。イサム・ノグチはアメリカ人の作家レオン・ギルモアを母に、日本人の詩人・野口米次郎を父として明治37年（1904年）ロサンゼルスに生まれましたが、村瀬さんによれば、レオン・ギルモアは稲造と万里夫人と同じキリスト教のクエーカー派で、その関係から在日中のイサム・ノグチを夫妻が援助したそうです。そうした縁で、昭和8年（1933年）に稲造が亡くなるとイサム・ノグチはこのレリーフを作り、以前の援助のお礼にと、昭和9年（1934年）万里夫人へ贈ったそうです。

その後万里夫人は、自宅よりも三本木にある新渡戸文庫（大正14年・1925年設立）に置いて多くの人に見てもらった方が良くと文庫へ寄贈しました。その資料を受け継ぎ、現在当館で展示しています。

十和田市・プラネタリウムにて

三本木原開拓をテーマに市制50周年記念番組を上演

十和田市民文化センター内にある十和田市視聴覚センターのプラネタリウムでは、市民の手による番組制作を行っています。平成16年度の冬の番組は、同年10月10日に十和田市が市制施行50周年を迎えたことを記念して、市発展の礎を築いた三本木原開拓をテーマに「三本木原開拓秘話物語」を制作し、平成16年12月11日から17年3月13日まで上演しました。現代風にアレンジされた新渡戸傳が測量技士とともに登場し、江戸時代の人々がどのように星を見ていたか、星座にどんな名前をつけていたか、当時の測量法やいろいろなエピソードをまじえて星空を紹介していました。

平成15年度軸装資料から

大坂冬の陣図

平成7年度～14年度の修復事業として必要な資料はほぼ裏打ちすることができました。今後は、大型の絵図面の軸装を中心に行い、展示や貸出に活用していきたいと考えています。今回は平成15年度に軸装した所蔵資料から、大坂冬の陣図を紹介しします。

大坂冬の陣

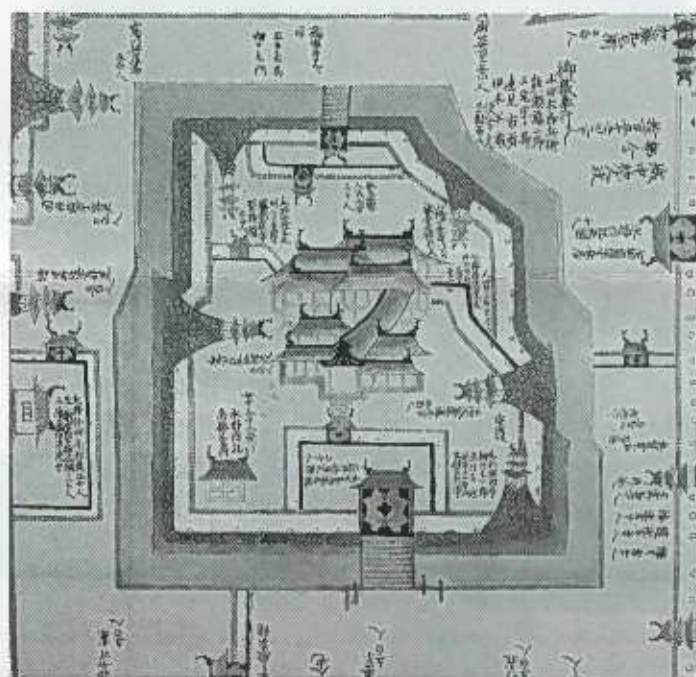
大坂冬の陣（慶長19年・1614年11月）は、それに引き続く大坂夏の陣（元和元年・1615年5月）との2度にわたって徳川家康が豊臣家の拠点・大坂城を攻めた戦いです。冬の陣では、徳川方20万の大軍に対して、10万の豊臣方が浪人衆の寄せ集めであったにもかかわらずよく防ぎ、外堀りの中へ徳川軍を一兵も突入させませんでした。徳川方は「大坂城の外堀を埋め三ノ丸を取り壊すこと」という講和条件をもちだし、豊臣方もこれをのみ終戦しました。しかし、徳川方は外堀だけでなく強引に内堀も埋め立て、大坂城は本丸ばかりの裸城にされました。結局豊臣方は再び兵を挙げ夏の陣が開戦しますが、守りの甘くなった大坂城では徳川の大軍に太刀打ちできず、豊臣秀吉の子・秀頼とその母淀君は自刃、豊臣家は滅亡しました。

両軍の布陣詳細に

絵図面を見ると大坂城に外堀がありますので、冬の陣の図であることがわかります。この戦には真田幸村や薄田隼人（岩見重太郎）など歴史小説でおなじみの伝説的な豪傑たちが登場しますが、絵図面には大坂城内に立てこもる豊臣方、城を取り囲む徳川方の軍の配備について、どの武将がどこに布陣したか、兵の数、武器の種類など詳細にわたって記載されています。徳川方には南部藩二代藩主・利直の名前も見えます。

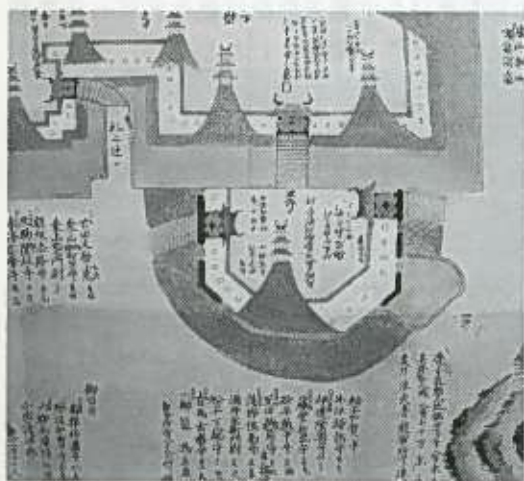


▲大坂冬の陣図 縦140×横122(cm)



▲大坂城外堀の南東に飛び出したように築かれた真田出丸(写真中央)。真田幸村がここに結め、徳川の大軍を迎え撃った。城壁には一間(約1.8m)ごとに銃眼6個が開けられた強固な塔だったという。写真左下には「御目付/十万石/南部信濃守利直」の記載が見える。

▲本丸部分拡大。本丸内には豊臣秀頼と淀君を守って総勢2万3千人の兵が詰めたと記されている。



ありがとうございました

●資料の寄贈

加藤万治さん(秋田県平鹿郡十文字町)から、昭和初期の三本木町関係資料を寄贈いただきました。万治さんの父・佐藤万次郎さんは1937年(昭和12年)9月はじめに召集を受け、軍馬の調教のため三本木町に滞在しました。寄贈いただいた資料はその折のもので、三本木町を撮影した古絵はがき13葉や三本木町長からの書状など貴重な資料です。



◀寄贈いただいた資料の一部

関連情報

◆土佐町小中学生交流使節団来館

姉妹都市高知県土佐町から、小中学生の使節団一行20名が平成17年2月18日記念館に来館しました。旧十和田湖町と土佐町は高知の文人・大町桂月をゆかりとして姉妹都市を結んでいます。十和田湖の素晴らしさを初めて全国で紹介したのが桂月であり、それにより十和田湖は景勝地として広く知られるようになりました。桂月は生涯十和田湖を愛し、晩年は本籍も蕨温泉に移しています。また、桂月は土佐町との交流も深く、酒豪として知られた桂月にちなんで土佐町では銘酒「桂月」も生産しています。蔵元である土佐酒造には酒蔵文学館があり、土蔵



づくりの館内に、桂月直筆の書や写真、図書などの資料が展示されています。

◀見学する使節団のみなさん

〈編集後記〉

平成7年6月の創刊から10年、第40号を発行することができました。新十和田市の誕生により発行部数も増えます。視野の広い編集を心がけて行きたいと思います。今後ともご協力をお願いします。

◆青森県冬季観光シャトルバス利用客が来館

平成17年2月4日から2月27日まで、今年も十和田湖休屋において「十和田湖冬物語」が開催されました。これに伴い開催期間中には県外観光客を対象とした青森県冬季観光シャトルバスも運行されました。

昨年に引き続き、このシャトルバスの立ち寄り施設に当館が組み込まれ、期間中468名の来館者がありました。

活動報告

◆元朝参り

平成16年12月31日午後11時から平成17年1月1日午前1時30分まで、太素塚への元朝参り参拝者に甘酒、お神酒の無料サービスを実施しました。また、「五千円札さよなら企画」として新渡戸稲造肖像五千円札発券の折に作成された記念旗3点セットを先着100名様にプレゼントしました。深夜にはあいにくの大雪となりましたが、多くの参拝者で賑わいました。その折、参道の雪かき作業を飛び入りで手伝って下さったボランティアの方々に、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

◆市広報の連載記事「木々は見ていた」に旧十和田湖町地区の樹木も紹介

平成15年5月1日から市広報に「木々は見ていた—十和田市の古木たち—」として、市内の古木巨木を地域の歴史とともに紹介していますが、平成17年1月1日の十和田市・十和田湖町の合併後は、旧十和田湖町地区にも範囲を広げて紹介しています。記念すべき合併後の広報とわだ創刊号(平成17年1月12日発行)には、大正15年(1926年)に国指定天然記念物となっている「法量のイチヨウ」(樹高:32m・幹周:14.5m)と「十和田市の防風林」を紹介しました。

◆デーリー東北に「稲生川・水の旅路」を連載中

平成16年12月31日付デーリー東北『十和田市、十和田湖町合併特集号』には、三本木原開拓についての特集記事が見開きの紙面で大きく掲載されましたが、それに引き続き形で、平成17年1月6日からデーリー東北へ稲生川についての特集記事『稲生川・水の旅路～静かな流れが秘める苦闘の歴史～』(3月31日まで13回連載予定・毎週木曜日掲載)を寄稿しています。

発行 太素顕彰会
 十和田市立新渡戸記念館
 ☎034-0031 青森県十和田市東三番町24-1
 TEL (FAX) 0176-23-4430
 E-mail: nitobemm@hi-net.ne.jp
 http://www.towada.or.jp/nitobe/
 印刷 株式会社 岩間印刷